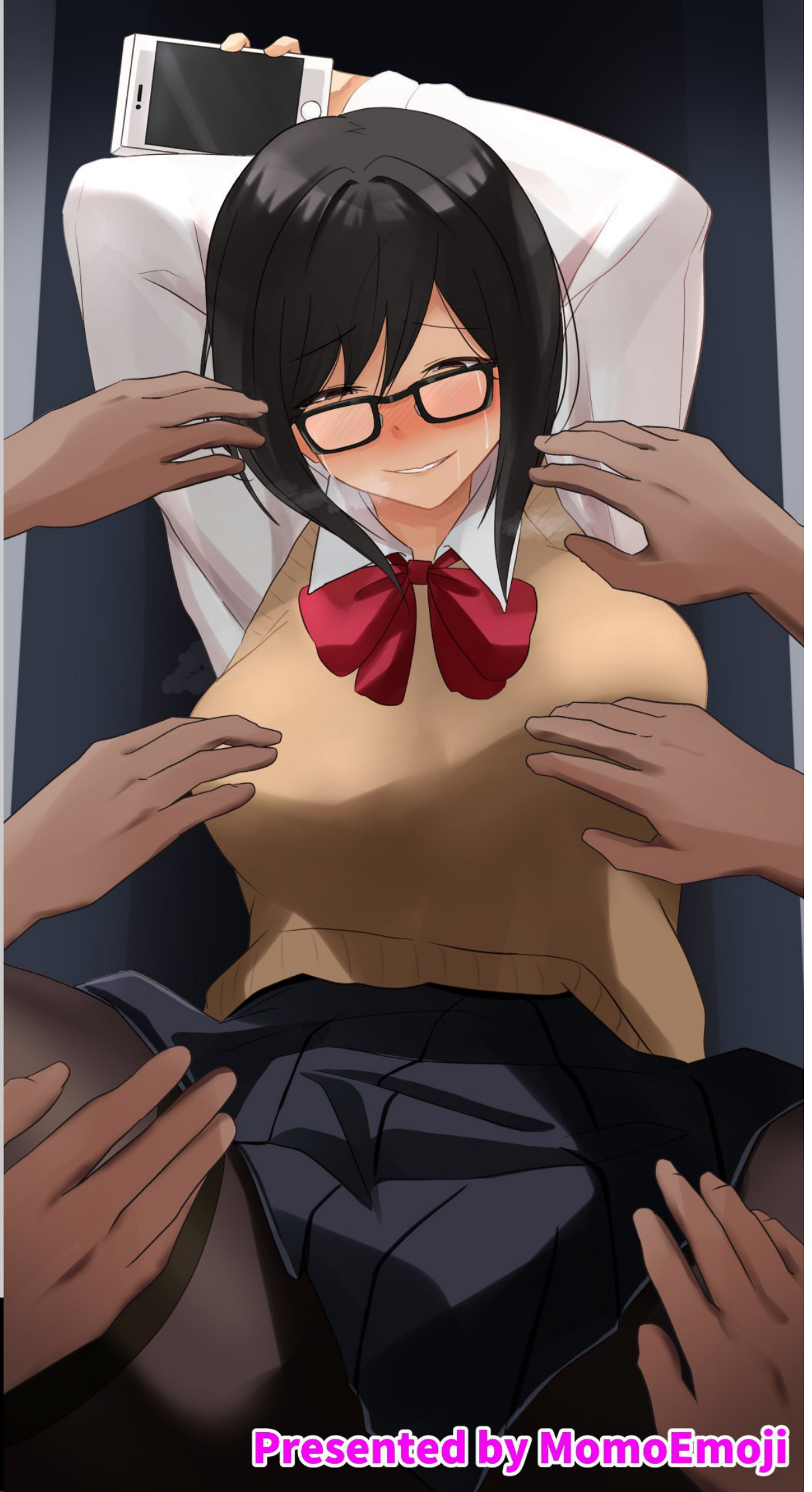


女子だつて催眠アプリ使つても良いよね



K

Presented by MomoEmoji

夕食を終えた伽音（かのん）は、それから寝るまでの数時間を自室でダラダラと横になりながら、ネットサーフィンで過ごすのが恒例となっていた。

典型的な現代病と言える。特に理由もなく、楽しげもなく、夜更けまでスマホを弄って日々を消費する。その時間を勉強にでも費やせていれば……と思いながらも、結局は変わらない。寝る間際になって自身の非生産性にウンザリしつつも、きつと明日も全く同じ夜を過ごすのだろうと確信する。

そしてまた後悔する。自己嫌悪する。

そう分かつてる癖に、なにも変えられない。伽音とは、そんな女の子だった。

外見は平凡と言って良い。

黒髪は肩下まで伸びて毛先は自然な内巻き。前髪は目に掛からない程度の長さで、インドアの白肌によく映える。顔立ちは整ってないとも言えないけど派手さがなく、クラスに何人もいるような、いわゆる「普通」水準の位置から動いたことはない。制服のスカートは膝丈でメガネ着用。たまに結ぶポニーテールには、健全な男子を惑わしかねない可能性を秘めているものの、それを発揮した経験は一度もなかった。要は、パツとしない女。引っ込み思案な性格。交友関係が狭く、成績は意外にも悪い。それらが劣等感を攪り、卑屈さを助長していた。

退屈そうに、意味もなくスマホの画面をスクロールする伽音。

日曜の夜。友達とのやり取りは終わり、推しの動画も一通り見終わってしまった。時計を見ると、まだ日付けを跨ぐ前だ。

明日は学校なのだから、もう寝ても良い筈だけど、普段の悪習がそうはさせない。

「はあ……つまんない。今日だけじゃない。毎日。下らない」

「みんな、楽しそうにしてるのに……なんで私の人生だけ……」

SNSを眺めていると、週末を楽しく過ごした同級生たちのアピールが鼻に付く。恋人とデートやら、或いは友達同士での買い物、家族旅行。十人十色。綺麗な色。羨ましいと思うなら出掛ければ良いのに、そんなの面倒と言って手で振り払い、部屋にグダグダ引き籠もり、それでいて劣等感を抱くという灰色の週末。

本来、こんな奴に都合の良い天啓なんて下されない筈なのだ。

「はあ………ん？」

何度目の溜息の中。突然スマホの画面が暗転した。

「え？」

慌てて電源ボタンを押す伽音。しかし、画面は真っ暗なままで音沙汰がない。思わず上体を起こす。再起動も出来ずに急激に目が冴えだす。

「まさか、壊れた？」

と、数分が経つと画面が明るくなる。

ホッとしたのも一瞬だけ、スマホに現れた文字に、伽音は再び戦慄した。

【Mind Control Pro くよういそ】

【インストール中……】

黒の画面に映る、少し字体の崩れた日本語。まず思い浮かぶのは海外のウイルス。焦った伽音が電源ボタンを長押しするも効果は無い。

瞬く間にインストールは進んでいき……

「インストールが完了しました」

「えっ、ちよっ、マジ？ なにこれ、ヤダ怖い！」

見たこともないアプリのアイコンがホーム画面に現れた。

【Mind Control Pro】

不気味な目のアイコンが画面の中央で光っている。

「なに、これ？ こわ！ 消せないんだけど。消せないじゃん！」

長押しをしても、初期アプリのようにアンインストールの項目が出てこない。

試しに再起動してみたけど、アプリは依然として存在している。完全にスマホに居着いてしまったらしく、伽音の不安がどんどん込み上げていく。

どうしようもなくなった伽音は、暫くしてアイコンをタップする。

すると、アプリが起動して説明画面が表示された。

このアプリは、あなたの思いのままに他人を操る力を与えます。
使い方は簡単。操りたい相手を検知して、プロンプトを書き込むだけ。
アプリが自動的に相手の脳波を操作して、あなたの望む通りに行動させます。

■注意事項

- ・このアプリの存在は誰にも明かさないでください。
- ・相手の生命に関わる命令は厳しいペナルティが課されます。
- ・我々はセンシティブに寛大です。どうぞ、あなたの意のままに。

さあ、新しい人生の幕開けです。思う存分、楽しんでください。

伽音は目を疑った。

こんなアプリがあるはずがない。きっと、悪質な詐欺アプリだろう。

触れぬが吉日。だけど、伽音の性格上どうしても気になってしまうもので……

何故かドキドキする。最初から、どこか期待している自分がいたのかもしれない。

つまらない自分の人生を変えてくれる、なにかを……

「本当に人を操れるの？ そんなわけ無い。そんなわけ……」

もちろん、半信半疑なんてもものじゃない。ほぼ確実に偽物だと思っている。

だけど、こういう荒唐無稽な能力が登場する小説や同人誌を、腐るほど見てきた伽音は、何処か少しだけ世間ズレしている所もあり……絶対に嘘だと思いつつも、仄かな高揚感が隠し切れずにいた。

画面は簡素なインターフェースで作られており、直感的に操作が出来る仕様だ。

対象範囲。領域内の人物の表示。選択画面。操作画面。

「ブルートゥースみたいに範囲内でキャッチした対象物を選ぶみたい。うわ、凄い広範囲で数千人くらい選べるよ。えっと、あ、これお母さん？ ええ……個人名がズラリと。これって、マジでマジなんじゃないの……？」

どんどん。どんどん、鼓動が高まっていくのを感じる。

だからって、いきなりトンチンカンな命令を打ち込む訳にはいかない。

誰かが騙そうと高みの見物をしている可能性があるのだ。

伽音は、唯一の男友達と言って良い、幼馴染の真銀拓哉を選択した。

【明日の朝七時。私に電話をかけてきて】

実行ボタンを押す手が少し震えていた。

「……こんなの、絶対うまくいくわけない」

そう言い聞かせながらも、伽音の心臓は高鳴っていた。

もし、本当に拓哉から電話が掛かってきたら……

そう考えただけで心臓が高鳴る。目を瞑るけど冴えまくって仕方ない。

結局、伽音は寝つけなかった。

頭の中では、もしこのアプリが本物だったらという期待と不安に駆られていて。

朝の七時前。寝付けなかった伽音がぼんやりと時を過ごす。

時計の針がゆっくりと七時に近づいていく。

あと一分。伽音の手は汗ばんでいた。

そして七時ちょうど。本当に、スマホが鳴り響いた。

画面に表示された名前に伽音は息を呑んだ。

拓哉からの着信だった。

「う、嘘……」

伽音の手が震えている。信じられない気持ちで電話に出る。

「も、もしもし？」

「あ、伽音？ お、おはよ。いや、なんか、急にお前に電話しなきゃって思ってたよ。い、いや、なに言ってたんだ、俺。べ、別に勘違いすんなよな？」

拓哉の明るい声が聞こえてきた。

拓哉が言い訳がましい言い訳をするも、伽音の耳には届いていなかった。

「い、いや。全然変じゃないよ。ありがと、拓哉くん」

「あ、ああ。んじやな」

電話が切れた。伽音はしばらく、呆然とスマホを見つめていた。

「はあ、はあ。はあ、はあ……落ち着いて、私」

信じられない気持ちと、背筋が寒くなるような恐ろしさが入り混じる。

このアプリは本物だった。伽音は人を操る力を手に入れたのだ。

しばらくして、伽音は再びスマホを手を取った。

アプリを開いて、もう一度説明を読み返す。

「Mind Control Pro」の機能

■対象者の選択

地図に映った対象者を選択します。

範囲は限られます。領域拡大のアップデートの予定アリ。

■命令の入力

テキストボックスに命令を入力します。
具体的であればあるほど効果的に作用します。

■実行時間の設定

予約設定可能。最大24時間先まで指定可能です。

■命令の強度調整

- ┆ 弱（相手の意思をほんの少し誘導する程度）
 - ┆ 中（相手の意思に反しない範囲で行動を促す）
 - ┆ 強（相手の意思を完全に制御する）
- 三段階から選べます。強度は「中」でも十分な設定です。
「強」の選択にはご注意ください。

■記憶の操作..

命令実行後、対象者の記憶を操作することができます。
完全に忘れさせる、あるいは別の記憶に置き換えることが可能です。

■フィードバック機能…

命令が実行されたかどうか、アプリが自動的に検知してお知らせします。

■履歴管理

過去に行った操作の履歴を確認できます。

必要に応じて、過去の命令を取り消すことも可能です。

■注意事項

- ・このアプリの存在は誰にも明かさないでください。
- ・相手の生命に関わる命令は厳しいペナルティが課されます。
- ・我々はセンシティブに寛大です。どうぞ、あなたの意のままに。

伽音は、改めてこのアプリの恐ろしさを実感した。

使い方次第では、人の人生を容易く狂わせることだって出来てしまう。

領域内から自分を選択することも可能のようだ。

試しに「健康状態を最高」に設定して実行すると、寝不足で軽い頭痛してたのに、一瞬で不快感が剥がれていった。

「ひえー！　こりや、とんでもないぞ！　マジのマジのマジかも分からん！」
それどころか「最高の健康状態」である。いままで感じたことのない、それこそ身体に羽が生えたような心地が駆け巡った。

「どうしよう……どうしようどうしようどうしようっ！」

伽音の頭の中で、さまざまな可能性が駆け巡る。

いじめっ子を懲らしめる？

異性を振り向かせる？

学力も運動能力も最高状態にしてもらう？

それとも……このアプリを消去してしまうべきだろうか？

葛藤する伽音。しかし、好奇心と欲望が、彼女の理性を少しずつ蝕んでいく。

「ちよつとだけ……ちよつとだけなら、使ってみても良いよね？」

そもそも消せないアプリだ。無駄な葛藤である。

どうせ試さずには居られなくなる癖に、間に一つ謎の葛藤を挟んだ方が理性的に見えるだろうという……別に誰も見ていないのに、そういうのをやってしまう所が伽音の人間性。落ち着きのある女性もとい、陰キヤ体質だった。

言わずもがな、伽音は再びアプリを開いた。

今度は誰を、どんな風に操ろうか……？

彼女の指が、おそるおそるスマホの画面に触れる。新しい命令を入力する画面が開かれた。無限の可能性が一手の中に収まる。伽音の心臓が高鳴る。

この小さな操作が彼女の人生を、そして周りの人々の人生を大きく変えてしまう。そう思うと、引っ込み思案の伽音の、なんと鼻息を荒くした顔が印象的だった。

登校。最高の健康状態で通学は、目の前が全て透き通って見えた。

自然と徒歩も逸り、気づけば学校に着いていた。

いつもより、明らかに早い足取りだったらしい。校門を潜り、伽音が深呼吸する。手の中のスマホが、まるで生き物のように震えているような気がする。

「……………」

周りには、登校する男女の姿がある。

友達同士、或いは男女で登校する学生も見受けられる。よく見ると、一人なのは自分だけだ。ムツとした伽音が伽音はアプリを開く。ズラリと並ぶ対象者。範囲は広く、学校に居る者なら誰でも選べるようだ。

ふと、目の前を歩く男女カップルを見つめる。一人はクラスメイトの男子であり、もう一人は別のクラスの女子。中学からの付き合いらしい長いカップルだ。

「……………ゴクッ」

震える指で男子の名前を入力する。

藤田レン。イケメンで社交性も抜群。彼女持ちにも拘らず、ハイスペックだから多くの女子から色目で視られている。ダメ元で告白した女子も多いらしかった。

それでも、いまの彼女を大切にしているというのだから、性格まで完璧といえる。そんな男子を身勝手にも操るなんて……と、流石に罪悪感が込み上げる。

「まあ、まだアプリを完全に信じた訳じゃないから。これは、飽くまでお試しで」なんて誰への言い訳も虚しく、慎重にアプリを操作した。

【伽音への好感度MAX】

プロンプト以外にも、タップで他者と接続して、簡単に操作が出来る項目もある。伽音を【親】としてレンを【子】に設定……デフォルトで存在する【好感度】からゲージを操作する。

現状は9ポイントと表示されている。

「これって、いまのレンくんの私に対する好感度ってことだよな？　なんか……うん、いや、妥当だよな。100を最高値にした場合の、9ポイント……」

異性の中では幼馴染の拓哉の次くらいには話したことある筈なんだけど……

あまりの低さに自信を失いかけたものの、それも詮無き話であり、すぐに操作を開始する。ゲージを持って縦にスワイプ……9ポイントから上限最大の100まで伸ばしていった。

そして、送信ボタンを押す瞬間、伽音は目を閉じた。

再び、良心の呵責。

だけど、どうせ結局やるのだ。

僅かな間の後に、伽音は命令を送信した。

……五秒、十秒。変化は無い。と、失望しかけた時。

心臓が……飛び出しそうな勢いだった。

「……ッ！」

前を歩くレンが、ちらりと伽音に振り返ったのだ。

（うわわわ、わわわわわわわ！）

しかし、すぐに彼女へと向き直ってしまう。

偶然、振り返っただけ？　もしかして効いてない？

と思うよりも早く、その後もレンがチラチラと何度も伽音に視線を送ってくる。

誠実で完璧な彼氏のレン。彼女の手前、裏切るわけには行かない……と思いつつ、どうしても伽音が気になり、紅潮した面持ちを隠せずに、そわそわしていた。

（ああ……ヤバイ。これ……脳みそが弾けた感じ。ヤバイ……）
その瞬間。アプリが本物だと確信した瞬間。

伽音が性的絶頂にも似た感覚に苛まれる。絶対的な高揚感に、脳が溺れたようだ。視界の景色が全てクリアになる。思わず膝を付きそうになった。

………

それから、時は経って授業中のこと。

教師の死角になりやすい席であることを、今日ほど嬉しく思った日は無い。

お陰でアプリをイジれる。授業中に隠れてスマホをイジるなんて生まれて初めてだけど、そんな罪悪感なんて既に毛ほども感じられなくなっている。

操作画面を見ると、やはり校内の全てが対象範囲となっており、千人近い人物の名前がズラリと並んでいた。

名前がタブになっており、それをタップすれば神の真似事に至れる。

次は、どんなことをしてみようか？ もう、それ以外の考えはなかった。

アプリのチカラは本物。では、どうして所有者に伽音が選ばれたのか？

能力を与えた者は、きつと高みの見物をしているに違いない。

妄想力も甚だしい伽音を見下ろしながら、指さして笑っているに違いない！

そう考えたら、恥ずかしくてアプリなんて使えない。思い通りになりたくないし、アプリなんて使ってられない……なんて思っていたのに、いざ実際に効力を目前にしたら、全ての理性が露と消える。既に伽音は、酔いしれていたのだ。

と、その前に気になることがある。

（……レンくんが、まだチラチラと私を視てくれている）

これまで異性に注目された経験なんて一度も無い。

そんな伽音が、ホームルーム開始からずっと完璧イケメンのレンに熱い眼差しを送られているではないか。喪女の代表格とも言える伽音は気が気じゃない。伽音は、さつきから顔の熱が止まらなかった。

（レンくんの視線ッ、ヤバイ。ずっと私を視てる。あの、私とは真逆で陽気で頭が良くて運動神経も抜群で……そんなレンくんが赤い顔して私を……）

………ッ？

生まれて初めて味わう下半身の疼き。

当然のように、伽音は性的経験が皆無である。自慰は、一度だけしたことがある。ただ、最後までイッてないし、重い孤独を感じて二度としたくないと思っていた。そんな伽音の、無性に触りたくて堪らない疼き。下半身の疼きに苛まれる。

（カラダ……熱い。汗掻いてきちゃった。それに、下の方が………こんなの初めて）

（もし、レンくんに触ってもらいたってプロンプトを打ち込んだら、授業中もやってくれたりするの？ そんなのヤバすぎ……レンくんに迷惑は掛けられない）
と言いつつ、気づいたらアプリでレンに接続していた。

（私ってば……なんてことを……）

【レン 授業中 隠れながらオナニー 伽音以外には見つからずに】

（ふわあああああ！）

何故か伽音は、自慰に浸りたい欲求をレンへと被せる。

伽音は後列の窓際。レンは、廊下側の最後列に位置している。

再び視線をやると、やはりレンと目が合う。彼女に一途だった筈なのに、いまは伽音に夢中らしい。伽音の一挙手一投足に釘付けとなっていた。

そんな誠実だったレンを、遠慮深い性格だった伽音が、利己へと溶湯する。

（送信……）

震える指先で命令を送信する。アプリのチカラは、すぐさま証明された。

「……………ッ！」

命令の強さは中程度（相手の意思に反しない範囲で行動を促す）に設定した。

まだ使用して僅かだというのに、こうした機器の操作はお手の物と言わんばかり、レン個人のステータス画面を開き、性欲の項目をMAXにイジる。加えて伽音への好感度も最高状態なので、これでレンは伽音に興奮して伽音に恋して、伽音を肴にオナニーをする筈だ……と、伽音の浅ましい策略が働いていた。

普段から卑屈な妄想に耽る女に、こんな万能なアプリを与えてはいけない。

……という良い教訓になったろう。見事にレンの思考はアプリに支配されていく。寝るように机に突っ伏したレン。周りから見えないように机の下で股間に触れる。(ヤバ。めっちゃ勃起してる。如月さんって、あんな可愛かったか？ 朝ちよつと見かけてから気になって……ちよ、授業中なのにヤバイ……あああ……)

遠くから伽音を見つめるレン。股間は、大きく膨らんでいた。

隠すように手で山を覆い、その頂きを親指の腹で優しく弾いていく。

伽音のプロンプト通りに、周りに見えないようにしての自慰である。

この体勢なら、もし人に見つかっても多少の言い訳が出来る。繊維越しに伝わる心地良い感触に、思わず呻きを漏らしそうになる。ちようど亀頭を擦るように指で何度もスリスリ、スリスリ、スリスリ……

そして、何度も伽音を見る。

今朝から、どうも気になる女性。いままで一度も気にしたことない相手なのに。

伽音を視てるだけで下半身が煌めく。彼女相手にも感じたことのない興奮。

叶うなら、チャックから取り出して思いっきり扱きたいくらい、レンの下半身がマグマのように情欲に染まりきっていた。

一方。伽音の方。

レンの視線を一身に浴びている。レンの、性の臭いを感じている。

性の材料にされる心地を生まれて初めて味わう心地に、もはやパニックだった。

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバいいっ、レンくん……あああああ、私なんかでオナニーしてるっ、めちやくちや興奮してるのが伝わってくるよおおッ。私のこと、大好きなんだ。私を視て興奮して、オナニーしてるよおおおおっ！）

顔が真っ赤に染まり、背中まで汗がびっしょりだ。

周りから不審に思われているかもだけど、そんなの全く気にしてられない。

伽音の下着も熱で溶かされていく。

他人には強制している癖に、自身には授業中に自慰へと浸れる度胸がない。

だけど、下半身の疼きは限界に達している。

そこで伽音は、アプリで自分自身を選択した。

（発情するってこんな感じなんだ……本当に、自我が無くなって行く感じで。もう限界っ。レンくん、一緒にイこうっ……！）

だけど、プロンプトは絶対的。強制的に絶頂感が込み上げる。

それでいて、じわじわと……時間を掛けての絶頂だった。

一瞬でオーガズムを処理する男子に、こんな感覚は中々味わえないだろう。

射精する！ という時間が何十秒も続いていたのだ。

レンも同じく赤面。同時に、味わったことのない絶大な快感に理性が沈んでいく。

そして……

（ひやあああああああああああつ！）

（あああああああああああああつ！）

ドクドクドクドクドクッ！

ジクジクジクジクジクッ！

授業中。二人の男女が同じタイミングで絶頂を果たすのだった。

伽音に至っては生まれて初めてのオーガズムだ。

理性が溶けていく感覚。全身の疲労感。一言で表せば虚無である。

スカートを軽く。パタパタと仰ぎながら、絶大な余韻に身を任せていた。

レンも、これ程の快感は生まれて初めてである。よくある話として、女の快感が

男より何倍も上なのは、感度や性感帯の数などもあるけど、とにかく快楽を味わう時間が長いからだ。

ズボンの中で味わう長い絶頂。着衣状態での射精に絶望感を覚えつつも、まるで魂が浄化されていくように全身が弛緩する。気を張らなければ、このまま意識が落ちそうだった。

一分近くの夢の浸りは、とてつもない快感と疲労感を齎しており、伽音とレンが二人して机に突っ伏す。肩で息を整える姿は流石に異様でしかなかった。

（如月伽音……だっけ。めちやくちや可愛い。マジで好きになっちゃったんだな）
アプリを存じないレン。不憫にも自分が自然と伽音に傾倒していると思い込む。
その顔は、だらしのない放蕩に満ちていた。

（レンくんのいった時の顔、最高だった。ああ、幸せすぎて……）

伽音は目を閉じた。あまりの高揚感と疲労感により、眠りにつこうとしている。
その面持ちから罪悪感は見受けられない。あつた所で意味はない。

それを証拠に、虚ろな脳裏に描く情景は、如何ともし難い劣情の一色なのだから。